



These New Puritansのライブ音源“Colours”を聴いていると、いろいろな物事は、結局のところ、シンプルな場所におさまっていくような気がして楽になる。

生きるのに必要なことは、ゴーなのか、ゴールドなのか。

ゴーしていたら、それが自然にゴールドにつながるようなビジネスが成功する。洗練された経営というものは、一人のゴーが、みんなのゴーへ、世の中のゴールドへ。そんな、つながりをうみだす。ぼくがオックスフォードのMBAで学んだ精神は、ライブハウスとラグビーで経験したことの延長だった。

「ゴー、ゴー、ゴールド」

ぼくはビールを飲みながら、ひとり呟いている。イツ、ゴールド！ ゴーゴーゴーゴー。

仕事上でつきあう相手とも、ゴーを共有していきたい。自分のゴールドではなく、みんなのゴーが、みんなのゴールドへ。

みんなROCKを忘れてしまっているのだ。

ぼくが、オックスフォードMBA時代のゼミで、日本経済とロックンロールについて論文を書いたことを思い出す。

20年前。ぼくが高校生のとき、ぼくらは誰彼と出会ってBOOWYについて語れば、ほかになにも話す必要はなかった。出身はどこで、内申点がいくつで、大学はどこを目指していて.....そんな話をする奴はバカげていた。音楽について話ができれば、それで人はつながることができるのだ。このシンプルな原則をなぜ学者は論じないのか？ それは、学者の多くがROCKやライブハウスを知らないからだろう。

「BE.....MY、BABY.....」

どちらともなく歌い始めれば、それで互いの胸の奥がみえてくる。＜信頼関係＞という四字熟語に信頼関係はないけれど、歌をうたいあっている時間には信頼がある。

大人になると、出会った相手はもう昔のように布袋のWALKING MANについて、急に話してきたりしない。彼らは事前にぼくが、財閥系金融マンだったことや、企業買収ファンドのスペシャリスト.....そしてオックスフォードMBA取得の起業家、という経歴を調べている。そうして、その＜看板＞と自分の＜看板＞を比較した前提で話をする。

たとえ、仕事の関係であっても、ぼくは、そういう状況をさびしく思う。いずれこういう世の

中を変えていきたい。

成熟した社会というのは、社会的にそれぞれの立場が違ったとしても、人間として一瞬で通じ合える文化を共有していることだと思う。信頼資本主義。そういう点でライブハウスは文化だ。

ライブハウスを10代や20代の遊び場だとかんがえる大人の常識を変えたい。ROCKは趣味ではなく、生き方そのものなのだから。

みんな、看板をぶっこわして、もう一度、ゴーすればいいんだ。  
ほんとにそうおもう。

ぼくは渋谷の事務所がある8階のマンションで、深夜ひとりでビールを飲んでいる。  
いまはVan Halen“JUMP”が爆音で鳴り響いている。

「アキさん……わざわざ事務所に防音設備なんているんですか？ 設備費用が嵩みますが……」

共同経営者のLは、目を細めていったものだったが、結果的にこれでよかった。ROCKを聴かなくなったら、ぼくはそのとき、ぼくではなくなるだろう。

ぼくはこれから朝まで、考え込む。

人間、ほんとうに考えこむときに必要なのは机と椅子じゃない。走るか、歌うか、飲むかだと思っている。自分の原点とつねに向き合っていないと、うまれてくる考えがぶれてしまう。

渋谷の上空で、深夜一人ビールを飲み続けながらVan Halenを聴いていると、ぼくの人生はもう、とっくに始まっているというのに、これからまたあらたに始まるのだ、という気がしてくるから不思議なものだ。

ぼくにとって、Van Halenを聴くというのは、ラグビー時代に戻ることも意味する。試合がはじまる前、当時はカセットテープに録音したウォークマンでVan Halenを聴いたものだった。

ラグビーのポジションは、センターだ。トップスピードで、ぼくと相手が頭からぶつかる場所。毎日、職人のように自分の体を筋肉で増強しているぼくらが、全力でぶつかっていく。

高校のとき、ぼくはそれで歯が折れた。折れた歯が邪魔だったので、タイムのときに自分の手でひっこぬいた。そして、またグラウンドで、相手と突進してぶつかった。

試合が終わると、チームメイトはみんな笑ったものだ。ぼくの口まわりが真っ赤にそまって口

紅をつけているみたいだったから。

あの時代に比べれば、もっとこわいことなんてことがあるだろうか？

折れた歯を自分の指でぬいた血まみれの顔面で、相手と頭からぶつかることよりこわいことがあるだろうか？

ここがラグビー場だろうが渋谷だろうが、20前後だろうが40前後だろうが、Van HalenはVan Halenであり、ぼくは、いろんなものを持ちすぎているけれど、いつだってぼくだ。

「ゴー、ゴー、ゴールド」

人生は、シンプルに、前のめりにすすんでゆく。

2

ビールを飲みながら、夜が明けていくのを眺めている。

ぼくは今年2014年、39歳になった。40歳まで、あと1年だ。

けれど、ちっとも自分が中年だという実感が無い。

いろんなストーリーを、これから立ち上げていくのが自分だ、という実感がある。

だけど、そんな話を先月、高校生に話して笑われたことをおもいだした。

「アキさんと話していると、俺のほうが大人みたいな気がする。だって、アキさんって、ROCKなんだもん。慶應でてるんでしょ、銀行マンだったんでしょ？ よくわかんないけど、株とかのプロでしょ？ オックスフォードにも留学してんでしょ？ なんで、俺たちみたいな不登校の高校生に一生懸命なの？ やっぱ世の中、金でしょ？ 金いるでしょ？ だって、アキさん。子供いるじゃん！ 奥さんもいるんでしょ。NPOとか500円ビジネスってさ……もうからないよね？ 俺だってそれくらいわかるよ？」

高校生が、ぼくの人生をまるで自分のことのように代弁して話してくれたとき、これだから、NPOをやったよかった、と思ったものだった。

きっと、彼が不登校になって、高校をやめたのも、彼が周りの高校生よりもよっぽどナイーブで気がきいていたからだろう。きいてみれば、県下一の進学校で、成績はつねに学年10番以内だったとき。そんな子が、不登校になった。親に褒められたくて勉強していたにちがいない。

気づいてしまったんだろう。自分は、自分の物語を生きたいと。だがそのとき同時に空っぽの自分にも気づいたんだ。勉強しかしてこなかった！ 親に褒められるからやっていただけだった

！俺にはなにもない！ そう気づいたときの空白の時間は、高校生だろうが30過ぎていようが、こわいにちがいない。

そんな勉強だけがとりえだった彼が、いまは僕が立ち上げにかかわった高校生のROCKバンドを支援する団体で活躍している。その子が、ぼくを責めている。なぜ慶應でオックスフォードなのに500円ビジネスなの？ なぜ、もっと金を儲けようとししないの？ と。その議論はなんだか心地よい。おそらく、高校生の彼はぼくを責めているながら、実は自問しているのだろう。なぜ進学校の道をやめて、ROCKをしているのか。そう、自分に問うているんだろう。いいだろう。ぼくにぶつかってこい。

高校生は、「どうして500円ビジネスなんか……」と言いつつも、その口調はどこか答えを知っているようでもあった。だからぼくはあえて笑ってすませていた。というのも、君みたいに、人生は自分のもの、と気づいてしまった人たちの受け皿をつくりたかったからなのだよ。だれでも、得意なものがある。マイナスをゼロにして、平均になったってつまらないじゃないか。好きなことがあれば、音楽でも漫画でも映画でも、なんだっていいんだ。それで生きていく最初の一歩みたいなものを、ぼくはつくりたかった。それが、君のいう500円ビジネスなんだ。高校生に「仕事はつくることができる」ということを教えたかった。

ぼくは、口には出さなかったけれど、高校生との対話を思い出して、ビールをまた一本飲んでいる。じつにいい気分だ。

ぼくは、その子が喋るのを黙って聞いていた。高校生って、いいな、と思ったよ。大人は誰もが、黙りこくる。慶應でオックスフォード、トップ銀行員で投資のプロといえ、そういう相手に大人は無条件にうなづくだけだ。誰も本音でぶつかってこない。トップスピードで、ぶつかってこないんだ。それに比べて高校生は、いつも本質でぶつかってくる。そうこなくちゃ。

たしかにぼくも思う。NPOや500円ビジネスでは、儲からない。でも、ぼくは、儲け方も知っている。けれども、儲けたその先にはなにがあったか？

しみこんでいるんだ。忘れられないのさ。ラグビーが。ROCKが。そりゃあ、どんな高級な酒だって、どんな高級ホテルにだって、金さえあれば泊まることはできる。けどね、どんな高級な料理だって一人で食べたってうまくないんだ。別に、ゴールドを否定しているわけじゃない。ぼくも自分のビジネスの成功方程式をたてている。

だけど、自分だけ稼いで得る達成感なんて、微々たるものなんだよ。ライブで夢中になっているときの楽しみのほうがよっぽど絶頂なのさ。だからぼくはこう考える。ROCKは、はたして音楽だけだろうか？ ライブハウスの陶酔感は、ライブハウスだけのものだろうか？

ROCKの本質さえつかめば、ビジネスにおいても、人々をみな熱狂させられないだろうか？ 儲かる儲からないだけが基準ではなくて、騒いでいるうちにみんなが幸せになるような仕事があるんじゃないだろうか。ぼくはそう考えている。

何本ビールを飲んだことだろう。

渋谷の夜明けを迎えたぼくは、たしかに酔っぱらっている。

Turn off your mind, relax and float down-stream

It is not dying, it is not dying

Lay down all thought, surrender to the void

It is shining, it is shining

That you may see the meaning of within

It is being, it is being

That love is all and love is everyone

It is knowing, it is knowing

iPodはまるで、ぼくの心の動きを察してくれているかのような選曲をしてくるから不思議なものだ。夜明けとBeatles。不登校の高校生の叫びと、ぼくの人生――。

自分の原点にもどるときに聴くこの曲ほど、ふさわしいものはない。

3

不登校の高校生から「儲からない500円ビジネス！」と言われてしまって微苦笑したものの、そのビジネス「ココカラ」は開設2年にして会員数100万人を超えている。誰もがWEB上で「自分の特技で誰かの役に立ちたい」という思いで動いている。そのやりとりはたしかに、500円である。けれど、そのやりとりがすでに5万件をこえている。

「儲からないでしょ！」

元進学校の高校生はそう言ったものだったが、実は、十分に「儲ける」だけの成果はだしている。もちろん、ぼくが投資銀行時代に稼いでいた金額にくらべれば、はるかに小さい金額だ。けれど、この500円ビジネスと企業買収ファンドの決定的な違いは、はっきりしている。もしもぼ

くが、うごかなければ、この5万件のやりとりは世間で起こらなかった――それだけははっきりしている。

14歳ではじめてギターを買った日のことを覚えている。レスポールカスタムとマーシャルの真空管アンプをもっているのが自慢だった。エフェクターがディレイだったということは、内緒だけれども。親友がベースを買ったので、二人でPERSONSのCAN'T STOP THE LOVEを弾いていた。もちろん、14歳の僕らがほとんど物真似みたいなオリジナル曲を作ったりもした。

そういうことが、生きるうえで、自分を支えていたりすることを、ぼくは大事におもいたい。

500円で自分の特技を伝えます――という、その500円は、なかば「いいわけ」みたいなもので、本当は「自分の特技」を自分以外の誰かに伝えたくて、うずうずしている。ぼくは思っていたし、その“うずうず”を世の中にひっぱりだして、みんなが自分の特技で世の中にぶつかっていけば、おもしろいことが起きると思うんだ。

夜が明けてしまった今日。2014年10月17日。ぼくは恵比寿であたらしいサービスをはじめようとおもう。

その名も「ココカラ・カフェ」。大人の出会い系カフェさ。

ぼくは前から思っていた。

オックスフォード時代、ゼミではよく日本の「出会い系サイト」がビジネスとして取り上げられて議論されたものだった。いわく、日本のウェブビジネスでは、「DEAI-KEI」というサービスサイトの業績がうなぎのぼりしている、と。

その「出会い系ビジネス」はほとんど、アダルトの部類に分類されているということだったが、日本にはれっきとしたポルノ産業としての風俗業界というものがある。出会い系サイトに使う金額や、女性との肉体行為を考えれば、風俗業界のシステムのほうがはるかに洗練されているというのに、それでも人々は出会い系サイトを使う。なぜか？

こういうゼミであった。そのときぼくは、思ったのだ。

みんなが「物語」を欲しているのだ、と。本当は“性”よりも“親密さ”がほしい人が、一体どれだけこの世の中にいるのだろうか、と。ただ、もっとも簡単で儲けることができるのが“性”という欲望に根ざした言い訳だった。

ぼくは、ここを変えたいと思っていた。同時に、“文脈”ということの大切さを実感したりする。

実際は“欲望”という言い訳を用意している出会い系サイトだけれども、もしもここに「自分の得意を、伝えたい」というココカラ精神を導入したらどうなるだろうか。そう考えたわけだ。

具体的には、いままでこの2年で100万人の会員を獲得したココカラの精神どおり、「自分の得意なことを、500円でつたえます」と「見知らぬ二人が会う」という出会い系サイトの精神をドッキングさせる。場所は、ぼくらが新しく用意した恵比寿の「ココカラ・カフェ」。

もはやサービスはWEBの文面だけじゃなく、恵比寿に現地集合という形式になる。WEBでやりとりしてもかまわないし、「ココカラ・カフェ」で対面してもいい。料金は500円。カフェでは、珈琲とランチを提供するけれど、それはもちろん、普通の実費でもかまわない。だけれども、「お互いの病気体験、健康にかんする不安や思い出」と題したトークをしてくれれば、ランチが無料になってついてくる仕組みになっている。

僕は、ずっと思っていたのだ。

2011年9月27日火曜日。

この日、ぼくは、最初にはじめるつもりだった健康系ビジネスの起業をあきらめた。

みんなが健康について不安に思っている。病気になってからじゃないと、医者は相手をしてくれない——そんな世の中を変えて、病気になる数年前から気をつけるような社会をつくりたい。そういう思いがあった。けれど、まず圧倒的にサンプルが足りなかった。それでビジネスとして成立しなかった苦い思い出がある。

ぼくは、まだあきらめていない。健康は、大事な問題だ。ただ、どうビジネスと結びつくかのモデルが、いまの日本に存在していないだけ。ぼくは、ココカラ・カフェを通して、ランチを無償で提供するかわりに、会話している客の二人に、健康問題についても徹底的に自分の話をしてもらいたい。

そして、500円で自分の特技を売る——という、ココカラをはじめるとき、ぼくは、どうしても音声にこだわったものだった。文章でやりとりするんじゃ、生の臨場感がない、と思ったからなんだ。だから、ネットに声を録音して、声でやりとりすればいいんじゃないか、って思った。でもこれは挫折した。声より文字でやりとりしたいユーザーが圧倒的多数だったからだ。

でも、対面したらどうなるか？ 対面の出会い系で、一番女性から不安要素としてあげられたのは「ナンパされたくない」というものだった。それなら、どうだろう。対面で行う「ココカラ・カフェ」のやりとりそのものも、500円で販売したらいい。つまり、販売者は、対面で説明することで自分の特技を500円で売るということのほかに、やりとりを公開することで、そこでも500



円の収入を得られる。それとともに、対面で不安要素だった「ナンパ」は公開録音ということで、自制装置の役目をはたす。

「性欲ではなくて、もっといろんな男女と話したい」という、人間の健康な欲求がある。出会い系では、文脈がなかったために「性欲」にしか消化されなかったものが、ココカラ・カフェでは、「特技を教える」「互いの健康や病気体験、病気への不安について語る」という、用意された「言い訳」で、出会える。

こういうサービスは、まだ誰も開発していないと思うんだ。

4

ぼくは、どうしても忘れたくないことがある。

いや、どうだろう。

昔、ぼくはどうしても忘れかけたことかもしれない。

けれども、ひとつははっきりといえることがある。

ぼくは、一生かかってもYOSHIには勝てない。

いや、負けたくない。

いつも、YOSHIと、同じ土俵で戦っていたいんだ。

1992年10月17日。YOSHI。あのころの、ぼくらにとって、ジョン・トラボルタの仮装をすることは、憧れのひとつだった。サタデーナイト・フィーバー以前に、フラッシュダンスがあった。16歳。あと一ヶ月で、YOSHI、17歳になってたんだ。君は、ただトラボルタの真似をしたただけだった。

ハロウィーン。日本でさえ仮装するこの季節。アメリカなら当り前のお祭りだ。ラグビー部で、フッカーとして、ぼくたちの中心にいたYOSHI。君が、誰よりもハロウィーンを楽しもうとしていたはずだ。

「フリーズ」

記録では、そうになっているけれど、ハロウィーンだ。トラボルタそのままの白と黒のスーツ姿の青年なんだ。16歳だったんだ。全然危なくも怪しくもない。それに、YOSHIは、ちゃんと「ハロウィーンなんです」と話をしたはずだ。それなのに、YOSHIは撃たれた。

YOSHI。ぼくは、というより、ぼくらは君が好きだったよ。今日は、10月17日。22年前、YOSHIの留学がきまったとき、ぼくらは円陣を組んで、君を見送ったよな。君は、第二の故郷と

おもいたい、といって、アメリカへ旅立って、銃で撃たれてしまった。

YOSHI。ぼくは、あれから、慶應へ行ったんだ。ラグビーも続けた。日本でもっとも有名な銀行へもはいったし、投資のプロにもなった。そんな肩書き全部投げ捨ててオックスフォードへ行ったし、高校生を支援するNPOや、まったくあたらしい株式会社をたちあげたよ。でもな、YOSHI。君には勝てない。

生きていたら、ぼくもYOSHIと同じレベルで勝負していたいさ。君は当時、愛知県でもっと優秀なフッカーだった。まだ16歳だったのに、すごい奴だった。オックスフォードでMBAをとったぼくがいうのだから、まちがいない。YOSHI。君はたった16歳で亡くなったけれど、君の死が、全米に銃について考えるきっかけを与えて、アメリカでは銃規制について、大きな動きがあった。16歳の日本人が、アメリカの在り方を変えてしまったんだ。

YOSHI。22年か。YOSHIの死がなかったら、ぼくは、国内一の銀行をやめていただろうか。投資のプロとしての道を捨てて、高校生を支援するNPOを立ち上げていたりしていただろうか。そして、今の事業、ココカラが生れていただろうか？

YOSHI。今日は、やけに絡んでしまったな。君がちょっとうらやましいよ。君はいつまでも、あの頃のままで、ちっとも変わらない。それなのに、死後アメリカを変え、ぼくらの生き方を変えた。健二郎を覚えてるか？ ぼくはオックスフォードへ行ったが、健二郎もマサチューセッツで学んだ。当時の仲間は、みんな、忘れられないんだよ。君の、16歳の君の、純粋な言葉がな！

それが、少しも嘘も混じりけもないから、余計に、残るんだよ。

YOSHI.

負けたくないぜ。

完全に夜が明けた。部屋のスピーカーでは、BlurがTenderをうたっている。

ココカラ・カフェ。

失敗する気がしない。